

令和元年5月17日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21405

研究課題名(和文) 死と苦悩の哲学に基づく自殺予防の実践 死生観形成のためのデス・エデュケーション

研究課題名(英文) A practice of suicide prevention based on philosophy about death and suffering

研究代表者

岩崎 大 (Iwasaki, Dai)

東洋大学・東洋学研究所・客員研究員

研究者番号：80706565

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：現代社会に顕在化した生と死に関する諸課題のひとつとして、本研究では自殺予防をとりあげ、従来の精神医学や社会的アプローチとは異なる、哲学による実践の可能性を示した。実存思想の哲学から、自殺者念慮者の苦悩を、生の本質的な苦悩の顕現と解釈し、苦悩の解消を目的とするのではなく、苦悩を伴いつつ生の本質をそれとして自覚し、それに応じることで獲得できる自己充実こそが、結果として自殺予防や生の空虚感の解消につながる実践となる。これを実現させるためには、生と死の体験と適切なコミュニケーションによる死生観形成を日常や教育に組み込む必要があることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自殺予防という社会問題を解決するための哲学的実践は、人生において苦悩が本質的であり、解消できることではないという自覚からはじまるという知見は、従来のメンタルヘルスや社会制度的なアプローチにある、相手への配慮ゆえに生じる自殺念慮者とのコミュニケーションの齟齬を克服し、前提のない生と死の思考を促すコミュニケーションの必要性を示すものである。そしてその実現は、体験や語りによって蓄積される死生観形成による、生の充実によってもたらされるものであり、これは自殺予防の実現に留まらず、現代人全体の生の充実や肯定を導きうるものである。

研究成果の概要(英文)：As one of the issues concerning life and death that have emerged in the modern society, this study has dealt with suicide prevention. I have shown the possibility of philosophical approach that is different from conventional psychiatric and sociological approaches for suicide prevention. Persons with suicidal behaviors have suffering for their life. According to existential philosophy, this suffering is just a manifestation of essence of life, and it can lead to their self-sufficiency. But modern people do not have the ability and opportunity to find out their own affirmation of life from this suffering. In order to realize suicide prevention and relieving of the sense of emptiness of life, it was found that it is necessary to make a environment in daily life and education in which people can take a chance to have life and death experiences and appropriate communication.

研究分野：哲学、死生学

キーワード：自殺 自殺予防 実存思想 死生学 死生観 死 デス・エデュケーション 不条理

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 死の隠蔽

現代社会は、文明化、医療化、宗教性の希薄化などを背景に、死を現実に目にする機会が極端に減少するとともに、具体的な死を語ることを忌避する傾向をもつ。死が隠蔽される社会において、死後生に関する認識を含む生と死についての考え方、すなわち死生観を確立することの意義は認識しがたい。しかしその一方で、終末期医療や自殺など、現代社会特有の生と死の問題が存在し、哲学、宗教的な実践が求められている。

(2) 自殺と死生観

日本では毎年2万人以上が自殺で亡くなっており、その予備軍である自殺念慮者も数多く存在する。自殺の原因を特定することは困難であるが、事実を精査することで、自殺者の心理は、「積極的な死への移行」ではなく、「消極的な生からの逃避」であることがうかがえる。これは、確たる死生観に基づく態度とは大きく乖離するものであり、むしろ「死を無視した死」であるといえる。だがこれは同時に、確たる死生観形成によって、自殺への意識が変化する可能性を示唆するものでもある。

2. 研究の目的

本研究は、死の物理的、精神的隠蔽が進み、死生観を持つことの意義が失われつつある現代において、確たる死生観の形成がもたらす社会問題の解決と生の変容の可能性を問い、これを自殺予防の哲学的実践という具体的な成果へとつないでいくことを目的とする。その際の個別の目標となるのは、1. 死および自殺の哲学に基づく自殺予防の再定義 2. 現代社会における死生観形成の意義を実存思想に基づく死と苦悩に対する考察から明らかにすること 3. 死生観形成のためのデス・エデュケーションのあり方を示すことで、自殺予防の実践につなげること、である。

3. 研究の方法

自殺予防のための哲学的実践を展開するにあたり、まずは自殺念慮者の抱える苦悩や意識の分析とそれに対する自殺予防の実践の体制や制度、基礎となっている価値基準を分析する。その上で、エピクロスに代表される死の哲学や、ヒューム、フーコー、デュルケム等の自殺論、アリエス、エリアス等の死の社会学的分析についての学際的な文献研究を行うことで、自殺の否定を前提とする既存の自殺予防とは異なる方法での自殺の意味づけと、それに基づく自殺予防の介入の再定義を行う。また、実存思想の文献と、実際の臨床での自殺念慮者の苦悩を比較検討することで、自殺念慮者の苦悩が、病的ないし偶然に存在するのではなく、あらゆる人間の抱える根源的な気分・感情の顕現であることを示すとともに、自殺念慮者がその苦悩に哲学的に感じられない現状も明らかにしていく。この現状を打開するべく、死生観形成を促すというかたちでの自殺予防の可能性と、その具体的なコミュニケーションプログラムやケア構造について、様々な研究者や臨床家の意見を取り入れながら提示する。

4. 研究成果

自殺予防運動の現状は、自殺者がうつ病などの精神疾患もつ割合の多さから、主としてメンタルヘルスを主軸として実践されているが、デュルケム以来、自殺を個人の心理ではなく、社会的問題とする認識も根付くようになり、WHO の報告書では、貧困、過労、いじめ、家庭など、自殺の要因は様々でありかつ複層的であるが、自殺は包括的アプローチを実践する社会的

努力によって予防可能な問題であるとされている。こうした個人に対するメンタルヘルスのアプローチや、社会に対するアプローチに加え、本研究では、これまで実践的価値を見出しえなかった死や自殺についての哲学的考察に注目した。「死にたい」や「消えたい」と語る自殺念慮者の意識は、自殺そのもの、あるいは死や死後についてよりは、現状の生の苦悩や空虚さに焦点がある。そのような意識・心理状態の者にとって、自殺をしてはいけないという社会的通念は、抑止力としての説得性をもちえないどころか、そうした前提に立って対応する専門家とのコミュニケーションの齟齬をもたらしまうものでもある。それに対し、エピクロスの死の哲学や死の形而上学、現代のメタ倫理学の議論では、死や自殺、さらには殺人でさえも、特定の価値観においてはそれを否定する論理的根拠をもちえなくなるものとするため、自殺念慮者に特有の視野狭小的な価値観を前提として否定せず、一旦は受容するコミュニケーションが可能となる。この哲学的なコミュニケーションが、自殺念慮者の視野狭窄を解消するために有効な態度と考えられる。

無論、冷静で理性的な判断ができる状態とは言いがたい自殺念慮者に対する危機介入(intervention)として、哲学的議論で対応するというのは、現実的な方法ではない。哲学を積極的に自殺予防に活用する方法は、危機介入以前に、自殺念慮を抱かせない第一次的な自殺予防(prevention)にある。それはすなわち、生と死についての体験と思考から、各々の死生観を形成させることである。死生観とは、死後のイメージに限らず、死を起点として、生そのものや、「今、ここ、私」の態度を決断するための基準となるものである。そして、自殺念慮者が抱える生の苦悩を、偶然や能力の問題とせず、解消不可能な生の本質的苦悩と捉えるのが実存思想である。アルベール・カミュは「不条理(l'absurde)」の概念でこれを説明し、自殺念慮者は、常に既に存在している生の本質的苦悩を自覚したにすぎないと同時に、その意識された苦悩への認識や対応に錯誤があると主張する。実存思想に基づけば、苦悩を通して生の本質や不条理への態度が覚醒するものとされるが、現代人は、その肯定的展開に至るだけの思考力や経験、コミュニケーションの体制が整っていないために、自殺念慮や生活への空虚感を抱いたまま留まる結果になっていると解釈することができる。

以上の考察から、哲学的な自殺予防のロードマップは、生と死に関する体験から、苦悩を伴いつつ生の本質を自覚し、その先に、ハイデガーのいう「本来的自己」を獲得することで、自殺念慮や空虚感を抱かず、生の充実へと至るような死生観形成を導くというかたちになる。そのために必要なことは、具体的な死の体験と語りを引き出す環境づくりと、無加害原則に基づく心理的負担への配慮ゆえに、生の本質的苦悩の発露を避けるような気遣いのケアではなく、ヤスパースが述べるところの、互いの真実を獲得するために傷つき争うことも引き受ける「実存的コミュニケーション」としてのケアである。これらを実現させるためには、死を医療現場や福祉施設の公的サービスとして処理する現状を改変する必要が指摘される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

岩崎大「環境問題は深刻な危機たりうるのか ヤスパースの限界状況論が示す環境意識の根本問題」、『エコ・フィロソフィ』研究 第13号、東洋大学国際哲学研究センター、査読無、p.115-126、2019年3月

岩崎大「医療倫理と臨床の固有性 医療従事者 - 患者関係の現象学的考察」、『神経現象学リハビリテーション研究 No.3』、東洋大学国際哲学研究センター、査読有、49-56 頁、2018年2月

岩崎大「死生観形成における日常性の問題 - 日常における死の隠蔽と非日常における死の苦悩 - 」、『東洋学研究 第 54 号』、東洋大学東洋学研究所、査読有、23-34 頁、2017 年 3 月

〔学会発表〕(計 1 件)

岩崎大「自殺と不条理 自殺予防の基礎としての哲学 」東洋大学東洋学研究所研究発表例会、2018 年 11 月 10 日、東洋大学、『東洋学研究 第 56 号』要旨収載、東洋大学東洋学研究所、2019 年 3 月

〔図書〕(計 1 件)

【共著】河本英夫、稲垣諭編『現象学のパースペクティブ』、岩崎大「解体される死 - 本来性の可能性をめぐって - 」、晃洋書房、2017 年 3 月 20 日、p120-133(全 211 ページ)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。